

「日本語法座」

祥月法要 2月6日(日曜日)

時間：午後1時～（日本語）

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に会い、阿弥陀さまの恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。



涅槃会 2月20日(日曜日)

時間：午後1時～（日本語）

涅槃会とは、おさとりを開かれたお釈迦さまのご遺徳をしのぶ法要です。

ねはんえ

涅槃会

日時：2022年2月20日(日曜日) 午前11時(英語) 午後1時(日本語)

2月16日は、お釈迦様がお亡くなりになった日にちで「涅槃会」といいます。

自分の死が近いことを察したお釈迦さまは、弟子たちにこう説かれました。

「私の亡きあとは、私ではなく自分自身をより所として、また私が伝えた教えを、闇を照らすともしびとして、歩んでゆきなさい。」お釈迦さまは、個人崇拜の対象となることを否定され、弟子一人ひとりが確かに、自立して進むことを求めたのでした。そして「もろもろの存在は変わりゆく。怠らず精進しなさい。」という最期の言葉を残し、静かに息をひきとったのでした。

お釈迦さまのご命日である涅槃会の日には、全世界各地の寺院でお釈迦さまのそのご遺徳をしのぶ法要が行われます。





ございません。むしろ雑草が心なき人々に踏みにじまれるように、幕府からの念仏弾圧を受けて流罪に処せられ、僧侶としての資格さえも奪い取られたような方でございました。そして、越後から関東へ、さらに京都へと移住しながら、名もなき念仏者として、いわば群萌の中に埋没するように生きていかれたお方でございました。

それだけに名もなき庶民の救われていく仏道をその全生涯をあげて確認して下さった方だと言えます。

背負いきれない程のつらい業縁がありながら、生きる凡夫の人生を通して、しみじみと身に染みる如来様のご本願の親心に感動されている親鸞聖人のお姿は、まるで私の救いを確かめていて下さるような感じがいたしました。

合掌

トロント仏教会

駐在開教使

大内祐真

ようやく物ごころがついた頃から、まだ母のひざにいだかれながら父が朝夕お内仏の前でとねえる「正信偈」の声を、仏前にまたたくお灯明を見つめながら、何ともいえないなつかしい思いで聞いたものでした。そして母の口うつしで、いつしか自分も、かたことまじりに「正信偈」がとねえられるようになっていました。

わたしの父や母は、わたしの少年時代になくなってしまいました。その後何年、「正信偈」だけは、なおわたしの耳に残り、口に残っています。そしてこれとなえるとき、父の声や母のおもかげが、ほうふつとうかんで来るのです。それからこのかた、おなじことを何辺となく口にくりかえし、耳に聞くのですが、不思議に飽きないばかりか、よめばよむほど、いよいよひきつけられるように思うのです。

大勢のお同行と、声をそろえてとねえることも有難いが、わたしは仏前の勤行ばかりでなく、ひとり道を歩いたり、家の掃除や、庭の草をひいているとき、旅の夜の眠れぬときにも、しずかに口の中でくりかえしています。辛いときも、悲しいときも、きつとわたしの口から、小声で「正信偈」が流れていきます。そして、いっしか熱い涙にぬれているのです。

「正信偈」は、光の道であり、命の温床です。わたしがこれをとねえるとき、あたたかい親のふところを感じ、おん同朋よ、とかしづきたもう、やさしいわが親鸞聖人の息が、通うてくるように思うのです。そこにわたしの父も、母も、そしてわたしも、共に救われているという安らかさが感じられます。

無始の業海にさすろうて、疲れきったわたし、いらいらした苦悩の炎に焼かれて、傷だらけになっっているわたしを、力強くよびとめ救いあげてくださるものは、大いなるみ仏のねがいと、み名の徳ではないでしょうか。

「帰命無量寿如来、南無不可思議光」このようにわたしがいたるとき、大安慰の世界がひらけ、人生最後の帰趣（おちつくところ）を知ることができるのです。

これこそ、親鸞聖人の唯一の生命であり、生活でありました。そして、それがそのまま、わたしの生命となり生活となってくたさるのです。わたしたちは、いくえにもその宝庫をさぐって、無上道を身につけなければなりません。

おりました。それをご覧になった聖人が、「その苦しきの中に、盛んに念仏申されること殊勝なことであるが、どのような想いで念仏されておられるのか。」とお尋ねになられた。

これに覚信房は、「喜びすでに近づけり、存ぜんこと一瞬に迫る。刹那の間たりというとも、息の通わぬほどは往生の大役を得たる仏恩を報謝せざるんばあるべからずと存ずるについて、かくのごとく報謝のために行つつかまつるものなり」と返答したと言われています。

つまりは、聖人と出会い、お念仏と出会い、阿弥陀如来のお慈悲に包まれ、極楽浄土へ往生することは、何とも何とも嬉しいことでありましょうか。その阿弥陀如来の恩徳に報謝してもしきれない恩義を感じ、感謝のあまり念仏申していたのです、と答えたのです。

そのとき親鸞聖人は、「長いこと給仕をしてくれた間、学んでくれたことである。その証があった。」と感激のあまり、ボロボロと涙されたと伝えられています。

親鸞聖人が好んで用いられた言葉に群萌といった言葉があります。

群萌の群とは、「群がる」ということです。群萌の「萌」とは、草や木の根が萌え出ることです。ゆえに、群萌とは群がり萌え出るものということであり、春になると野にも山にも雑草が一面に群がり萌え出てくるように、親鸞聖人は、この地上に生まれ出て雑然とした生活を営んでいる私たちのことを「群萌」という言葉で表されました。

私たちはこの世に生まれ来たからといって、別に新聞に取り上げられるような有名な人でもエリートでもございませぬ。せいぜい親子とか兄弟とか夫婦といったほんの僅かな身の者だけが、その生存を気遣い合いながら、肩を寄せ合うようにして、ささやかな生活を営んでいると思います。

私自身も、死んでいったとしてもそれこそ「去る者は日々に疎し」という諺があるように、いつしか忘れられていき、やがて生きていた証拠さえもこの地上から消えていくような存在です。

しかし、人から見れば取るに足らないささやかな生涯であったとしても、私にとっては二度と再び繰り返すこと

の出来ないかけがえのない人生です。だからこそ、つらいことや悲しいことが多くても、それでも私にとつてこの一生は有り難い生涯でございましたと合掌して死んでいけたらと願うのです。

この世に生まれてきて、おかげさまで聞かなければならないことは聞き留めさせていただけました、遇わねばならないものには、遇わさせていただけました、と豊かな実りを胸に抱いて、生涯を閉じていきたいものです。

特別な才能もなく、また後世に残るような功績もなく、日々の生活に追いまくられながら、まるで大地を這う雑草のように生きていく私どもを、庶民のこころをこころとして、救いの道を確かめて下さったお方は、何といたっても親鸞聖人をおいて他にはございませぬ。

聖人は最澄や空海のように天皇の使となつて宗教界に君臨された方でもなければ、生きておられた際に高い位について煌びやかな宗教貴族として振る舞われたことも

佛心

二〇二二年二月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会



報恩講

先月の十六日は、親鸞聖人の命日法要である報恩講を生田グラント先生を御講師としてお招きし、厳修させていただきました。

親鸞聖人は、もともととは比叡山天台宗の僧侶であり、さまざまな書物から多くの研鑽を積み、多くの大変厳しいご修行に取り組んで参られました。しかし、いくら研鑽を積み、ご修行を重ねても自身の救われる仏道を見いだすことが出来ませんでした。

そしてさらなる救いの仏道を求めて二九歳の時、その比叡山を下りることとなったのです。

その下山をされた際に、七高僧の一人である法然房源空聖人（法然聖人）からご教授を賜わり、阿弥陀如来の他方本願のおはらたきにであわれることとなりました。

それからは念仏のみ教えを我が身のものだけで済ませることなく、多くの人々に教示し、多くの方々が門信徒として親鸞聖人を慕うようになりました。本日はその親鸞聖人が晩年、関東から京都に戻られたときのお話をさせていただきます。

宗祖親鸞聖人が生きておられた晩年のこと、関東の高田というところに覚信房という門信徒がおられました。当時は、文字を読める人もごくわずかでしたので、念仏のみ教えを知るには、実際に親鸞聖人から聞くほかありませんでした。

関東でも熱心に聖人のお話を聞いていた覚信房は、もう一度親鸞聖人にお会いして念仏を唱えたいと願っている京都へ向かうことを決めました。

しかしその旅の途中で覚信房は病いを患い、同行していた者たちは、「関東へ帰るがよい」と覚信房を促していました。しかし彼は、その身を押し立てて京都の聖人のもとへ向かうと覚悟を決めており、聞く耳をもたず、やつとの思いで親鸞聖人と会うことができたのです。

親鸞聖人は、体も心も疲れ果てておった覚信房の姿を見て話しかけると、覚信房は、「死ぬ程の病ならば、関東へ帰っても死ぬのであろう。ここに留まっても死ぬのであろう。また病が治るのであれば、帰っても治り、ここに留まっても治るのであろう。同じことなら聖人のお側で、死ぬのであれば死のうと思いついて上りました。」と聖人にお話になりました。

その数日後、覚信房の病状も重くなり、いよいよ最後の日になるであろうという日が来てしまいました。そのことを聞きつけた聖人は、覚信房の様子をうかがいに向かわれました。そのとき覚信房は、呼吸の息が荒く、今まさにいのち終わろうかというのに、絶えがたく念仏を申して